



連載 I  
あの町この町  
第58回

# スローシティのすすめ——福岡県・香春町

ドイツ文学者・エッセイスト

池内 紀

(イラスト＝著者)

九州の小都市を訪ねてきた。そのときの写真もあるし地図もある。メモも取った。にもかかわらず、いまもってよくわからない。まるでのぞき眼鏡でのぞいたように、小さな、懐かしい風景が目の前に浮かんでくる。福岡で仕事をすませ、小倉で一泊。翌朝早めに駅を発った。日田彦山線といつて、福岡県の小倉と大分県の日田を結んでいる。駅でもらった時刻表兼沿線情報マップはカラー絵入りで、沿線の店や名物の紹介に加えて「ひたひこ共通クーポン」なるものがついており、日田彦山線活性化推進沿線自治体連絡会の発行。三市三町一村の名が掲げている。ローカル線維持のための涙ぐましい努力が見てとれる。

はじめて乗る路線なので、熱心にまわりの景色をながめていた。鉱山があるらしく、山並みの一角が切り取られていたりする。国道322号が寄りそうように走っている。おおかたの人は車かバスなのか、乗客の大半は通学の生徒で、制服姿がいなくなると、ガラんとした車内に朝の陽ざしがさしこんでいた。

こちらの目的地は香春町といつて、四十分たらずで着く。金辺峠という山あいを抜けると、微妙に風景が変化した。白壁の集落、段差のある地形、目のとどろかぎり、のこりくまなく耕され、道と畦とが絵地図のように美しい。駅名が「採銅所」というのは銅山の名こりだろうか。「次は香春」のアナウンスで降り支度をした。

町のことは歌人土屋文明のエッセイ「豊前鏡山」で知った。戦前のことだが、小倉でアララギ会の歌会があるのに際し、先に香春で泊つて、翌日、小倉の会に出るつもりでいたところ、鉄道の時間が合わず中止した。それでもやはり思いがのこったので、歌会のあと世話人の車で峠を越えていった。そんなに執着したのは万葉集に町の郊外の鏡山がうたわれており、万葉学者でもある歌人としては、「是非一見したい」と久しく念じていたからだ。万葉集の歌というのは、次の三首である。

河内王を豊前国鏡山に葬りし時手持女王の作れる歌三首

王の親魂会へや豊国の鏡の山を宮と定むる（巻三、四一七）

豊国の鏡の山の石戸立て隠りにけらし待てど来まきぬ（四一八）

石戸破る手力もがも手弱き女にしあれば術の知らなく（四一九）

河内王という貴人が豊前鏡山に葬られ、ゆかりの女性が詠んだ。文明たちが訪ねたころは、もうそんなことは忘れられていて、「香春の町が前方に見えて来たので車を止めて附近の人家で河内王の御墓はと尋ねたがどうも分からない」といったふうに訪問記はつづられていく。鏡山は山ではなく集落の名であることが判明。ようやく探しあてたところ、「河内王御墓参考地」というヘンな標示板が立てられていた。宮内省（当時）

としては、ここを墓所と決定しかねて曖昧な標示にしたらしい。河内王という宮びとは紀元七世紀の持統天皇のころ大宰師に任じられ、赴任して五年後に死去。詠み手の「手持女王」は妃のようだが、身分その他一切不明。あとでわかったことだが、御墓参考地の近くにもう一つ社がある。ところが本来の鏡山かもしれない。万葉集には、ほかにも鏡山をうたったものがあって、その一つは、次のとおり。

豊国の香春は吾家紐兎にい交り居れば香春は吾家（巻九、一七六七）

もつとも、私は遠い昔の万葉びとよりも、町自体に興味があった。背後に香春嶽という山があり、それが石灰岩の採掘で、「半面を殺ぎ取られ断崖が白々と立って居る」というのだ。麓は勾金という古い村だという。採銅所―鏡山―勾金―香春。地名をたどるだけで独特の山国のイメージがわいてきて、夢をそえられるではないか。



駅前広場の大きな石に、貝原益軒の『豊国紀行』の一節が刻んである。『養生訓』で有名な益軒先生はもともと福岡の人だが、元禄七年（二六九四）、はじめて当地へ来たらしい。

「香春は豊前田河郡なり。香春は名所也。萬葉九卷に哥あり。又此神の事神社考にあり。香春嶽とて高山あり……」

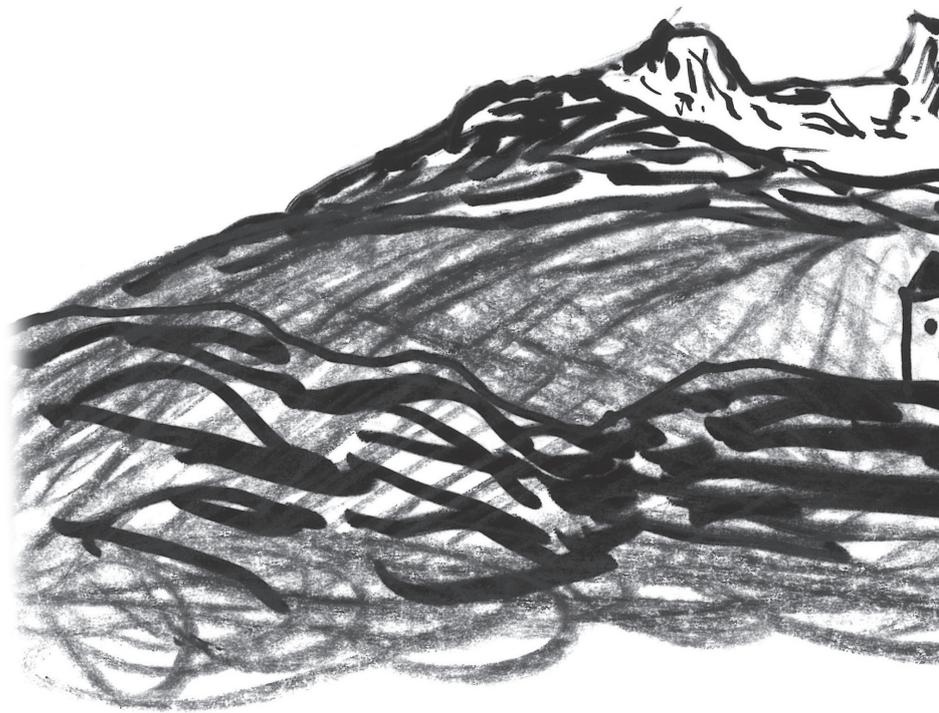
本業が医者だったせいも、紀行文はそっけない。地名を羅列しただけで、立派な黒い大理石がもったいないくらいのものである。

石碑から目を上げて辺りを見まわしたとたん、おもわず目をみはった。町並みをへだてて、かなたに見えるのが香春嶽だろう。山というよりも、「半面を殺ぎ取られた断崖」そのもので、グランドキャニオンの溪谷の一部を高台にのせたぐあいだ。目を据えたままゆるい坂道を下り、金辺川のほとりに立つと、正面に全景がひろがった。正確にいうと香春嶽は一の岳、二の岳、三の岳のつらなりで、町から見えるのは一の岳の一面にすぎないが、切り取られて露出した岩の壁が、幻のように大空に浮いている。山腹に碎石場があつて、砕かれた石が屋根のあるベルトコンベアで川沿いの工場へと運ばれてくる。

町の入口に風格のある店があつて、「名菓千鳥饅頭」の千鳥屋。創業寛永七年（二六三〇）というから、益軒先生より、さらに古い。少し先で通りが二手に分かれていて、「従是南豊後日田道」の石標が見える。香春はながらく小倉街道一の宿駅だった。

つづいて大きな寺の大きな堂。山門わきの左右の石柱に「國富民安」「丘文来月」と、風雅な字体で刻まれている。古木が枝をのびした下に自然石を敷きつめた石畳が奥につづいている。朽ち葉がきれいにはき寄せたあつて、チリ一つない。おもわずたどつていくと、本堂の前に来た。無住とは思えないが、人のけはいがなく、辺りは静けさを煮つめたように静まり返っている。

実はこのあたりから記憶があやしいのだ。個々のことははっきり覚え



香春嶽一の岳と碎石場

ているのに、全体がボンヤリしていて、のぞき眼鏡の風景に似てくる。

またも通りが二手に分かれ、まっすぐは旧日田道で町名が山下町。右に折れこむのは店の並ぶ生活道で、魚町と標示されている。山下町は文字どおり香春嶽一の岳の山裾にあたり、寺が一つ、また一つ。空地の前で大きな「伊能忠敬測量記念碑」と向き合った。文化九年（一八二二）七月、測量隊を率いて彦山より香春に来た。山下町の年寄の屋敷に泊り、翌日、おりからの日食観測のため、先に小倉へ向かった。測量隊メンバーは分宿して実測にあたった。

少し行くと古い町によくあるが、通りが鉤形に九十度、さらにまた

九十度折れてつづいていく。「札の辻」と石柱があり、指さした手の形で「呼野 石原町 香春 / 大隅 秋月 久留米」と、それぞれ逆方向を差している。

石組みの上に赤レンガを積みその上に瓦をのせた雄大な塀の前に「御茶屋香春藩庁跡」の石柱。江戸時代は小倉藩に属し、藩主の領内巡見のための宿泊所としてお茶屋が設けられていた。幕末の混乱期には、小倉藩の藩庁の役目をつとめたことがあって、このような二重の命名になったようだ。

さらに行くと、ひろびろとした更地で、中央の奥まったところの三段式の白い御影石に、「田川郡役所跡／香春町役場跡」と二行分ちで刻まれている。明治末年に田川郡の郡役所が置かれ、郡制廃止のちは町役場として使われた建物があった。すべて取り払われて、すぐかたわらに大きな不動産広告板が立ててある。

「旧香春町役場跡地 宅地分譲開始！」

石柱のある小さな一角だけのこして、全十区画。団地名を「プラチナタウン香春」という。山から吹き下ろす風に「分譲中」の旗がハタハタとはためいていた。

一つ一つ克明に覚えている。にもかかわらず、なぜか現実のことと思えず、夢のなかの風景のようである。一つには、ここにくるまでのあいだ、まるきり人に会わなかったせいだろう。人の姿がなく、軽トラックが一台走り通っただけだった。無人の町のように、そこに黒い影を落として古風な家々が並んでいる。音がしない。テレビの声も流れてこない。犬も鳴かない。

町役場跡地の山側は人の背の倍ほどもある高いコンクリート塀がのびていて、何げなく見上げると、十匹ほどのサルが塀の上にズラリと並んでいます。一歩近づくと、いつせいに立ち上がり、こちらを見下ろしながら、ゆっくりと塀づたいに裏山へと消えていった。さながら白



光願寺跡の大樟

日夢のような気がしたのは、そんなこともあずかつていた。

町役場跡地一帯が本町で、かつてはいちばん賑わったエリアなのだろう。ひとけのない家並みの一角に「竹本津大夫誕生の地」とあって、旧家の俵が義大夫になじみ、長じてその道の名人といわれる人になった。

魚町筋にもどる角は広大な空地で、立派な塀と門だけがのこされている。古木が一本、ていていとび、白い敷石がナゾの通路のように点々とつづいている。

「肉のまつかわ」「仕出し 鉢盛」「長谷川療術院」「鮮魚 刺身」「寶石 時計」……。看板もシャッターもガラス戸も古びているのは、廃業して久しいのだろう。

「お客様各位 御挨拶申し上げます」

もっとも新しいのは二〇一四年三月吉日の日付で、理髪店のお知らせ。三月三十一日をもって店を閉じる。「病気療養のため」とあって、病を押してつづけてきたが、もはや限度と思い定めてのことではあるまいか。

どんなシャッター街でも理髪店と美容院だけは営業中の光景を見なれてきたが、最後の砦が落ちたぐあいだ。四十五度にうねった通りにお昼すぎの陽ざしがかかり、建物の黒い影がギザギザ模様の影絵をつくっていた。

本通りにもどって気がついたが、山裾の少し高いところに石仏が立っている。一体だけが、じつとこちらを見つめている。不審に思いながらながめていると、三輪車の孫をつれた年配の人がやってきた。はじめて人に会って、なにやら懐かしくてならず、おもわず挨拶すると、丁寧な挨拶が返ってきた。石の仏は光願寺という由緒ある寺があったところで、山崩れのため廃寺となったなごりだそうだ。

山の斜面に天を覆うように大木がのびている。県文化財指定木の<sup>大樟</sup>で、根周り15・6メートル、胸高周り9・2メートル、枝張り東西29メートル、南北20メートル、樹齢約800年。山崩れの際にも、よくもちこたえ、境内の半分がたを救ったという。

「上がってみますか？」

すすめられるままに、半ば草に埋もれた石段をのぼっていった。石仏は等身大で、お地藏さまのつくりである。仮普請の小さなお堂があって、それも背をこす草につつまれている。樟は幹に大きな空洞があるが、悠然と枝をひろげて、たくましい。植物は、根を張ってしまえば、急斜面でもへっちゃらしいのだ。

遠慮がちに過疎がすすんだことをいうと、その人は無言のままうなずいた。旧道が整備され、小倉がゲンと近くなり、とたんに町から若い人がいなくなった。近くに道の駅ができて、商店がつぎつぎに廃業していった。畳屋、薬局、すし屋、洋品店、青果店、スナック、料理屋、カメラ屋、写真館が二軒、自転車屋、文房具店、豆腐屋……。歌うようにしてあげていく。

「醤油の工場もありました」

近くに行くと、モロミの匂いがした。何代もつづいた味噌づくりの店

もあった。すべてなくなつて、髪を刈るにも遠出しなくてはならない。

「いい町なんですがねえ」

ひとりごちのように言うと、グズリだした孫を抱き上げ、三輪車をぶら下げて急坂を下っていく。その背に声を高めて、お礼を言った。

川筋にもどるすがら、イタリアで出くわした「チッタズロー（スローシティ）」の運動を考えていた。何年ぶりかで北イタリアを訪れて、同じ町がこうも変わるものかとびっくりした覚えがある。スローシティは文字どおり「ゆっくり（ズロー）」をモットーにして、忙しない現代を追いかけない。あらためて自分たちの土地と風土を見直そうという運動だった。自然、歴史、文化、生活、その他に「資産」が眠っていないだろうか。あまりに日常的で、住んでいると気づかない。いちど「よそ者」の目で見直すと、ステキな宝物がひそんでいる。掘り起こし、現代的な価値を見つけ、そこを基本にして「ゆっくりした町（チッタズロー）」の地域づくりをする。そんな町々を紹介する本も出ていた。イタリアの小さな町があざやかに、大都市に負けない魅力と底力を提示した。

イタリア以上に日本はスローシティの必要に迫られているだろう。地方都市、農山村の疲弊ぶりがいわれて随分になる。香春町の場合、なぜこうなったのか、どうすればよかったのか、今後どうすればいいのか。「資産」なら、いろいろあるのだ。和製グランドキャニオンのような景観、原型をそっくりのこした旧市のたたずまい、サルと共存できる自然、郊外には万葉ゆかりの遺跡。

「香春『鍋屋騒動』」

横丁の一角に、幕末に起きた事件の経過がしるしてあって、供養塔が建てられていたが、日本の近代化のなかでこの小さな町にも歴史の嵐が吹き抜けた。文化遺産、歴史遺産、生活資産は、ほんの少し手をかすだけで、きつと甦る。朝食つきの安い宿で旧市街が急に明るくなったり、古い建物をリノベーションして、お洒落なカフェをつくった町もある。

ちよつとした工夫と知恵、それに夢があると、てきめんに若い人がもどってくる。

川沿いの石灰工場は黒い巨人がうずくまったように大きい。ベルトコンベアが三角の大屋根につづいていて、支柱の赤い鉄塔が二本足のように見える。一方は黒い産業遺産、もう一方は白い自然遺産、これほど異質の二つがベルトで結ばれているのは珍しい。

現代芸術にはインスタレーションとよばれる表現の技法がある。自然のなかに現物を配置して、現場そのものをたのしんでもらう。二十世紀が終わり近くなって、必然的に生み出した表現法だろう。額ぶちのチマチマした美ではなく、風と雨と大気のなかに全身で体験してもらう。豊前・香春町は町全体が一つのインスタレーションのようにもとれる。人手ではなく歳月が選別してつくり出した。そんな目で再生の糸口を考えてもいいのである。

黒い工場と川をへだてて向き合うところに小学校がある。六角の小塔をもち、とてもいい建物だ。校門にプラスチックの人形が立っていた。黄色い帽子に赤いランドセル。クリクリした大きな目で、頬をふくらまして右手をスックとのぼしている。

「ハイ、名案があります」



ハイ、名案があります

自分たちの町の再生プランを思いついたぐあいなのだ。

（いけうち おさむ）